

平成23年度

大学入試センター試験 および 国公立大二次・私大

大学入試

分析と対策

英語

学校法人 河合塾
英語科講師 江本 祐一

林 啓林館

この冊子の内容は次のURLからもアクセスできます
<http://www.shinko-keirin.co.jp/koei/index.htm>

1. センター試験

(1) 筆記試験

出題内容、出題形式ともに10年度と大きな変化はない。10年度に大幅に減少した総語数は3,520語から3,764語に増えたが、平均点は118.14点から122.78点へと上がり、08年度の125.26点には及ばないものの、6割を超えた。

第1問

A が発音問題、B が音節分けのないアクセント問題という点は10年度と同じだが、アクセント問題で見出し語が消えた。発音問題は母音の発音を問うものと子音の発音を問うものがそれぞれ2題ずつの出題。問1 ① boast ② couch ③ glow ④ toe, 問4 ① chemistry ② monarch ③ ostrich ④ scholar は正答率が低いと予想される。アクセント問題は、2音節、3音節、4音節の単語が出題され、supreme や epidemic など馴染みの薄い単語が含まれており、全体としての難度が上がっている。09年度の comfort に続いて、発音問題ではアクセントのない母音の発音を問う問題 (format, instance) が出題されている。11年度は、特にカタカナ語と言われるものの出題はないが、カタカナ語も含めて、日頃から正しい発音、アクセントを心がけておくことが必要。

第2問

基本的には10年度と同様の出題。A では、文法の知識そのものを問う出題は問3の仮定法の問題 (I wish + S + 仮定法過去完了) のみで、動詞の語彙や語法、イディオムの表現の知識を問う問題が大半を占めている。問4の in flight や問6の by appointment あたりは、やや正答率が低いかもしれない。もっとも、直接的に問われることはないにしても、英文法の知識は英文を読み書きする上で必要不可欠である以上、基本的な問題集を1冊こなししておきたい。また、語彙や語法、慣用的な表現の知識は、様々な英文を読むことで強化しておきたい。

B では09年度は3問とも定形表現の知識を問う問題が出題されていたが、10年度、11年度は、対話の流れから正解を得る問題が中心で、リスニング

試験の第2問と同様の出題である。

C の語句整序問題では、09年度、10年度と状況説明つきの出題であったが、11年度は状況説明文がなくなった。また10年度には選択肢が7つの出題があったが、11年度は選択肢は6つで統一されている。特に正答率が低そうな2題を下に挙げる。

問1 Thank you very much for _____ when I bought my car.

- ① advice ② gave ③ great
④ me ⑤ the ⑥ you

問2 "What's up with Jack? He seems so happy."

"He applied for a new job, and _____ an interview."

- ① called ② company ③ for
④ him ⑤ in ⑥ the

問1では、“thank you for + 名詞”，目的格の関係代名詞の省略，問2では called him in の語順が問われている。一般に“名詞 + 名詞 + 他動詞”の語順となる目的格の関係代名詞が省略された表現では、同じ単語を使って、“名詞 + 他動詞 + 名詞”とならべても、その部分だけ考えると英語は成立する。その意味で、問1では the great advice you gave me とすべきところを you gave me the great advice とするミスが考えられる。ただし、thank you for の後には名詞句が続く、ということを考えればこのミスは回避できる。また、“他動詞 + 副詞”の表現では、目的語が名詞の場合は、その位置は他動詞の後でも副詞の後でもよいが、目的語が代名詞の場合は他動詞の後に固定される。この知識が曖昧なために、問2で called in him とするミスが考えられる。一部の受験生を除けば、call in の in は副詞だから、という説明をしてもかえって混乱を招くことになりかねないので、多くの例文を見させ、また実際に音読させることで、自然にこの語順が身につくように指導すべきであろう。09年度の倒置による if の省略の問題ほどではないにせよ、A で文法項目の出題頻度が

低いのは対照的に、Cで文法項目が問われている。

第3問

Aは語句の意味を類推する問題、Bは発言の趣旨を選択する問題、Cは文補充問題の出題。Aでは *get one's head around*, *congenial* の意味が問われている。例年指摘している通り、日頃から、予習の段階ですぐに辞書を調べるのではなく、まず文脈から意味を推測してみる習慣をつけさせることが対策となる。3人の俳優による座談会での発言を問うBでは、司会者以外の発言に空所が設けられた点は目新しいが、これも例年指摘の通り、教科書の英文の内容をパラグラフ単位で要約する練習や、私立大学で見られるパラグラフ対応の内容一致問題などが、対策として利用できる。インドネシアのろうけつ染めを扱ったCでは、空所の設けられたパラグラフは、それぞれ「ろうけつ染めの手順」、「失敗しないためにしていること」、「複雑な手順以外の特徴」という趣旨で、10年度と同様にその内容が明確であると同時に、**[32]**や**[33]**では後に続く具体例が大きなヒントになったはずである。そういった意味で、パラグラフ単位で英文を読む習慣になっている受験生は比較的正解を得やすいのに対し、そのような読みができていない受験生にとっては難問であり、上位と下位で差がつかやすい問題である。Bの対策として培ったパラグラフ単位での要約や小見出しをつける練習がここでも有効であろう。第3問全体に対する苦手意識を払拭することが非常に重要であると考えられる。

第4問

Aは「EU諸国で重視される価値観」を扱ったグラフのついた読解問題、Bは英字新聞購読の広告文の読み取り問題が出題された。グラフの項目を特定する問題がなくなり、本文中の空所補充問題が復活した点を除けば、おおむね例年通りの出題。ただし、Bは10年度と比べると文字情報を読み取る必要性が高まったこと、設問の順序と広告文の記述の順序が異なることから、例年以上に上位・下位の差が開いているかもしれない。

第5問

10年度の変更をそのまま踏襲して、「2人の人物(父親と娘)のそれぞれが家族での外出」について

述べた英文が出題された。2人の発言内容にあうイラストを選ぶ問題は、10年度の事故が起こりそうになった状況を選ぶ問題に比べると、イラストもわかりやすく解答しやすい。英文量は10年度に比べると245語増えたが、内容も設問も平易なものであった。

第6問

08, 09年度と続いたエッセー調の英文から、10年度は論説文の読解問題に変わり、11年度もそれを踏襲して、「げっ歯類がうまく繁殖している理由」を述べた論説文が出題された。語数は891語で、ほぼ10年度(865語)と同じ。「本文で述べられていないもの」を選ぶ問題(問2)や、10年度までの「パラグラフのグループ分け」に代わって出題された「パラグラフの要旨の並べかえ」(問6)は新傾向。ただし、新傾向の問題も含めてパラグラフ単位での内容理解を試す問題が中心である。誤答の選択肢は「本文に記述なし」のものが大半で、パラグラフ単位で丹念に読み進めることで解答は得られる。ある程度のスピードで、パラグラフを1つの単位として理解しながら読み進めていく力を養ってきた受験生にとっては、比較的落ち着いて取り組める出題であった。

例年、本稿で指摘している通り、読解力の強化には、文法的知識と語彙力を高めるとともに、論説文をはじめ、エッセーや物語文を含めて、様々なタイプの英文を読むことが必要である。その際にはよくわからない部分があっても、少なくとも1つのパラグラフは最後まで読み切り、全体の内容を把握する訓練が効果的であろう。そのためには、比較的やさしめの入試問題で段落ごとに内容一致問題がついたものなどを利用することが考えられる。また、読解系の授業の予習の際は、あらかじめ生徒に制限時間を告げておき、まずは辞書なしで英文を読み、設問に答えさせる練習、つまり「予習は模擬試験だ」という姿勢での練習も効果的であろう。私自身の場合、生徒には、「予習段階で辞書を使う際は調べたい単語の半数だけを調べ、調べた単語は絶対にその場で覚えよ、残りは文脈から推測せよ」という指導をしている。外国語である以上、未知の単語があるのは当然のことで、それにいかに対応するかという訓練をさせるという

意図であるが、第3問 A などでは、直接役に立つはずである。また、一度読んだ英文を繰り返して読む、という訓練を嫌がる生徒もいるが、既習英文を繰り返して読むことで、読解のスピードが上がるとともに、語彙力の定着にも効果的である。その意味で、授業で扱った英文や自分が問題集等で読んだ英文は繰り返し読むように指導すべきであろう。これらはセンター試験に限らず、国公立大の二次試験や私立大の問題対策にも有益であり、たとえ入試で英語が必要なのはセンター試験だけ、というような生徒にも総合的な力を高めさせるために効果的であろう。

(2) リスニング試験

06年度の導入時には、36.25点だった平均点は、年々下がり続け、09年度には24.03点になった後、10年度には29.39点に上がった。しかし、11年度は25.17点へと再度下がった。読み上げられた総語数は10年度の1,088語から1,167語へと若干増加し、読み上げのスピードは第1問、第3問 A で少し速くなったが、これはそれほど平均点の低下と関係はないであろう。むしろ、最後まできちんと聞かなければ正解が得られない問題や、複数の情報を整理した上で解答を導き出さなければならない問題、意外な展開になる問題が出題されたことが、平均点の低下の原因であろう。

まずは、問5を取り上げる。

問5 What will the woman order?

〈選択肢のイラストは省略〉

[読み上げられた英文]

W : I'd like two medium pizzas.

M : How about our special? A large, a medium, and two drinks for a dollar more.

W : Oh, that's a good deal, but it's too much, and we don't need anything to drink.

M : OK.

結局のところ、女性は最初に自分が注文した通り、「ミディアムサイズのピザ2枚」を注文することになるが、特別なセットを勧める男性の発言に対して、Oh, that's a good deal と答えていることから、男

性の勧める「ラージサイズのピザ1枚、ミディアムサイズのピザ1枚、飲み物2つ」を表した絵を選んでしまう危険性がある。

次に挙げるのは、最後の発言に対する相手の応答を選ぶ問題。

問7

- ① No, I don't think it's yours.
- ② So, he can pick it up then.
- ③ Wait a second! You're right.
- ④ Well, I didn't give it to you.

[読み上げられた英文]

M : Excuse me. You dropped this.

W : Thanks, but I don't think it's mine.

M : Really? I thought it was yours.

落とし物をしたと指摘された女性が、「私の落とし物ではない」と答えるが、最終的には自分の落とし物であるとわかるという意外な展開となる問題。正解となる③以外では会話が成立しない、という消去法で解答を選ばなければならない。したがって、読み上げられた英文を注意深く聞き取るとともに、すべての選択肢の意味を正確に把握しておかなければならない、という意味で、正答率が低くなると予測される。

問20 What is the advice about moving with your cat?

- ① Buy your cat a comfortable bed for the new home.
- ② Encourage your cat to explore the new place.
- ③ Have your cat join you when you go outdoors.
- ④ Protect your cat from the stress of moving.

[読み上げられた英文]

Moving to a new home with your pet can be difficult. Cats are very sensitive animals, and moving is quite an upsetting experience for them. When you arrive at your new home,

it may be a good idea to put your cat in a quiet room, if possible. Leave him in peace with his old bed, his litter box, and some food until everything calms down. After that, let him come out and join you only if he wants to. He should also stay indoors until he becomes familiar with his new home and environment.

正解の④は読み上げ文全体を要約したもので、単に聞き取るだけでなく、その内容を正しく理解する必要がある。他の選択肢は消去法的に消していくことができるが、いずれも読み上げ文の中に含まれる表現を含んだ選択肢であるために、聞き取れた単語のみを手がかりに解答を導こうとする受験生には難しい問題。このタイプの問題は10年度にも出題されていた。本当の意味での聞き取りとはこういうものであるべきで、好ましい傾向である。

このほか、道案内で you'll see it right before the hospital の right が「まさに」の意味であることがわからなければ正解が得られない問3、正解となる語は読み上げ文には含まれないが、have a tooth pulled から、See the dentist. を選ばなければならない問6、hay fever が「花粉症」を表すことを知らなければ解答しづらい問12なども、正答率が低いと考えられる。

リスニングテストでは、例年本稿で指摘している通り、落ち着いて最後まで聞き取る姿勢が必要で、平常心で試験に臨めるレベルにまで聞き取りの力を高めておかなければならない。対策としては、①文字を見ないで繰り返し聞き、かなりの部分が聞き取れるようになるまで文字を見ない。②問題に答える。③文字を見て、聞き取った内容を確認する。④書き取る、という一連の練習を積むのが望ましい。特に④の書き取りまではセンター試験では必要ないという意見もあるだろうが、書き取ることによって、聞き取りに対する自信が深まること、語彙力や文法力の向上（聞き取れなかった部分を文法の知識で修復する）や、正しい綴りの定着につながるなど、その効果は大きいと思う。

選択肢の英文をあらかじめ読んでおくことなど、リスニング問題には読解力が影響を及ぼす要素も大きい。特に11年度はその傾向が顕著であったようだ。そもそも読み上げられた速度で英語を理解できなければ、それが言い換えられた選択肢が正解となる問題には対応できない。正しく速く読むということは、リスニング試験で高得点を取るためにも必要である。そのためには、筆記試験のところで述べた既習英文の反復読みが効果的である。

2. 国公立大二次試験

(1) 読解問題

国公立大学の二次試験では、内容説明や和訳などの記述問題が中心となるが、二次試験で出題される英文のレベルそのものはセンター試験の第3問や第6問のレベルと大きく変わらないことが多い。和訳問題でも、従来のように複雑な構文を読み解く、という作業はそれほど必要ではなくなった。複雑な文構造の把握力が求められているというよりは、比較的平易な文の構造を正しくつかむことが求められており、合格のためにはかなりの精度で和訳できる必要がある。その際に、内容面の理解を伴わなければ、平易なはずの構造もとれず、適切な和文が作れない、という問題が主流になっている。そのような傾向を反映したものとして、東北大学のⅡの下線部和訳問題を取り上げる。

下線部 (A)

over the years I've made several young friends, partly with selfish calculation — in case I live long, I won't find myself friendless, the friends of my age having died off.

<訳例>

1つには自分勝手な計算から、長年に渡って、私は何人かの若い友人を作ってきた。私が長生きした場合に、私と同じ年齢の友人たちが死んでしまっても、自分に友人がいらない、ということにならないようにするためである。

下線部 (C)

I've never especially connected beauty with youth and am always surprised when

someone says of an older woman, a woman of a certain age, *she must have been a great beauty*, since to me she still is.

〈訳例〉

私は美しさを若さと特に結びつけるということをしたことがないので、誰かが自分よりも年上の女性、つまりある年齢の女性について、あの人は若い頃は美しかったに違いないと言うと、いつも私は驚く。その人は私にとっては今でも美しいからだ。

下線部 (A) では、I've made several young friends という中心となる文を over the years と partly with selfish calculation という2つの副詞句が修飾しており、構造的には容易である。差がつくのはダッシュ以下の部分の構造把握と訳出で、ダッシュ以下は partly with selfish calculation を言い換えたものである、ということがとれなければ、in case が「…の場合に備えて」ではなく、単に when の代わりに用いられたものであること、文末の the friends of my age having died off が the friends of my age を意味上の主語に持つ独立分詞構文であることが把握できず、結局のところ、ダッシュ以下の和訳ができなくなってしまう。

下線部 (C) では、文末の since to me she still is の部分の理解で特に差がつく。and が2つの動詞句を並列しており、2つめの動詞句 am always surprised を when 節が修飾している。when 節の中は *she must have been a great beauty* が says の目的語で、says と目的語の間に of 句が挿入されているが、このあたりまでの構造把握は東北大学を受験する受験生ならば、確実にこなせるはずである。ただ、「わたしは美と若さを結び付けたことがない、だから人が…と言うと私は驚く」という前半部分の内容と、says の目的語が「彼女は（若い頃は）美人だったに違いない」の意味であることを意識しなければ、since 以下が she still is a beauty to me 「彼女は私にとっては今でも美人だ」という訳語が出てこない。

次に取り上げるのは、京都大学の [II] の下線部 (1)。10年度は、[I] で関係詞節の処理をはじめ、

重厚な構造を持つ英文の和訳、[II] では構文的にはそれほど難しい点はないものの、いざ和訳しようとすると適切な訳語選択に苦勞する英文の和訳が出題されていたのに対し、11年度は、10年度と比べると、構文的な負担は減った。しかし、内容を把握した上での適切な訳文の作成という意味では、かなりの難度であった。下線部 (1) は「旅の途中で知り合った人に、自分は物理学者だと打ち明けると、かなりの確率で、物理の授業は嫌いでした、という反応が返ってくる」という記述に続く部分。

下線部 (1)

You'll then spend the rest of the trip (or party, or elevator ride, or date) apologizing for the emotional trauma that physics has apparently inflicted on your friend. These random encounters often reveal an almost joyful contempt, reserved specifically for the fields of physical science and mathematics. "Oh, I'm terrible at algebra!" for example, is said in an almost boastful tone, in a way that "I barely even know how to read!" never would.

〈訳例〉

そうすると、あなたは旅（あるいはパーティーなり、エレベーターの中なり、デートなり）の残りの時間を、どうやら物理学があなたの友人に与えたい心理的トラウマについて謝罪しながら過ごすことになるだろう。このような偶然の出会いから、物理学や数学の分野に対して特に向けられる、ほとんど嬉しそうな蔑みの気持ちが明らかになることが多い。例えば「私は代数が全く駄目なんです」という言葉は、ほとんど自慢げに、「私は字を読むこともままならないんです」という言葉の場合には決してそうならないであろう言い方で、言われるのだ。

長い下線部であるが、3つの文から成り、1つ1つの文はそれほど長いものではない。構文的に難しいのは、第3文の in a way that... で、それ以外はそれほど難しい構文が用いられているわけではない。しかし、実際に訳文を作ろうとすると、第1文では、

下線部の前とのつながりを意識して then をどう訳すか、elevator ride をどう訳すか、第2文では random encounters や reserved specifically for... をどう訳すか、といったことが問題になる。そして、合格者も含めて、ほとんど全ての受験生が joyful contempt の訳出に苦心したようであった。joyful と contempt は、いわば全く逆の概念で、それが並べて用いられているこの部分は、まさに私自身のように理科系科目を苦手としていた大人からすれば、実感を伴ってその内容がわかるどころだが、受験生には難しかったようである。最終文では in an almost boastful tone と、問題の in a way that... がいわば言い換え関係にあり、そのこと自体は受験生レベルでも把握できていたようだが、「“Oh, I'm terrible at algebra!” という言葉が、ほとんど boastful な口調で言われる」の部分も、内容理解を伴わず、字面だけの訳出となっていたために、in a way that... が正しく捉えられた受験生はほとんどいなかったようだ。in a way that “I barely even know how to read!” never would の後には、be said が省略されている。that は関係副詞であり、この関係副詞節は “I barely even know how to read!” never would be said in an almost boastful tone のような英文が根底にあり、in an almost boastful tone が that になっていると考えればよい。10年度の [I] に出てきた関係代名詞節の把握同様に、11年度でも関係詞がらみで処理の難しい英文が出題されたわけだが、先に述べた通り、この部分は合格者でも正しく把握できた受験生がほとんどいなかったことを考えると、11年度に関しては合否の分かれ目にはならなかったようだ。

なお、下線部 (2) では S is put forward at the expense of ~や S don't get past A to B など、構造的には把握できても、文意に沿った訳出が困難なものが出題されていた。

ここで取り上げた東北大学の問題であれ、京都大学の問題であれ、内容的な理解を伴った和訳のレベルに達するためには、正確な文法の知識に基づいた正確な構文把握力が必要であることは言うまでもない。すべての受験生にこのレベルの英文を読みこな

す力が必要であるわけではないが、速読ということに目を奪われて基本部分をおろそかにしないように心がけるべきであろう。

また、記述問題が出題の中心である国公立大学でも、空所補充問題や、下線を引いた語句の意味を問う問題が出題されることもある。大阪大学では長文問題の中で appraisal / incentives / emergence / seminal / altruistic という5つの単語の意味を問う問題が出題された。incentives や emergence は市販の単語集に収録されているレベルの単語であるが、他の3つは文脈の手がかりがなければ(いや、文脈があっても、それをうまく活用できなければ)解答するのは難しい。センター試験の第3問Aにも通じることだが、外国語である以上未知の単語が含まれるのは当然、という態度で、文脈の中で単語の意味を考える、という訓練が絶対的に必要である。

(2) 表現力

例年指摘している通り、表現力を問う問題には、東京大学に代表される自由英作文の流れと、京都大学に代表される従来の和文英訳の流れがあり、自由英作文の方が主流になりつつある。自由英作文では、あるテーマについて自由に自分の意見を述べるもの(東京大・大阪大・一橋大・広島大)から、英文や日本文を読み、その内容について意見や感想を述べるもの(九州大・北海道大・東北大)、図表から読み取った内容を述べるもの(神戸大・広島大・筑波大)、手紙や e-mail などの書式で、あらかじめ伝えるべき内容が設定されたもの(金沢大)、対話文の一部を補充するもの(東京大・金沢大)など、多岐にわたる。そして、大阪大学、九州大学、東北大学などのように、和文英訳に加えて自由英作文を出題する大学もある。

自由英作文の問題として、広島大学の [V] [B] の問題を挙げる。

「沈黙は金なり」ということわざに見られるように、自分の意見や本心を言わずに済ませてしまうことが日本ではよく見られます。このような態度をどう思いますか。賛成、反対、どちらとも言えないなど、あなたの意見を、その理由を含め100語程度の英語で書きなさい。(以下省略)

10年度の岡山大学の「あいまい」を題材にした問題同様に、いかにも日本的な事柄を題材にした問題で、今後も同種の内容の出題は考えられる。自由英作文に関しては、インターネットや携帯電話の功罪、将来の夢、ことわざの説明、日本独自の文物の説明など、頻出のテーマに関する練習から入るのが効果的であろう。特に初めのうちは、具体的に書くべき内容を教師の側である程度まで挙げてやることで、何を書いていいのかわからない、という自由英作文以前の問題も回避できるのではないかと思う。

次に挙げるのは京都大学のⅢ(1)。

楽しいはずの海外旅行にもトラブルはつきものだ。たとえば、悪天候や自然災害によって飛行機が欠航し、海外での滞在を延ばさなければならないことはさほど珍しいことではない。いかなる場合でも重要なのは、冷静に状況を判断し、当該地域についての知識や情報、さらに外国語運用能力を駆使しながら、目の前の問題を解決しようとする態度である。

決してやさしい問題ではないが、例年と比べると非常に英訳しやすい日本語が出題されている。「楽しいはずの海外旅行」の部分で関係詞節を用いるならば非制限用法にすること、「トラブルはつきものだ」は適切な日本語に置き換える必要があること、「…しようとする態度である」はattitudeを用いると英訳しづらくなることなどを除けば、基本事項の積み重ねで処理できる。この問題に限らず、まずは、基本的な問題を数多くこなすことで、難しいとされている大学の和文英訳問題にも対処できることが実感できる。

そして、例年指摘している通り、自由英作文であれ、和文英訳であれ、生徒の書いた答案を添削するだけでなく、もう一度書き直させることが絶対に必要であるが、その際には、教師が添削する前に、自分

が書いた答案を自分で添削する、という作業、あるいは生徒同士で添削させるのも有効であろう。自分の書いたものであっても、改めて客観的に見直せば、内容的な矛盾点や、三単現のsの漏れなど基本的なミスにも気づくものである。もちろん、その後で、教師が目を通す必要があることは言うまでもない。また、生徒は自分の書いた英語の正しさを気にするが、教師レベルで辞書を引かなければ正しいかどうかの判断がつきにくい表現を無理に使うよりも、正しい表現、その文脈でふさわしい表現は正確に覚えさせ、的確な表現を増やすよう指導する必要がある。

3. 私立大試験

私立大学では11年度も圧倒的に客観式の問題が中心であった。空所補充、下線部の言い換え、内容一致などが中心的な出題の形式である。空所補充や言い換え問題では、単語や熟語等の語彙的知識をそのまま問う場合と、文意を把握した上で、未知の(あるいは難解な)語句の意味を推測する必要がある場合があるので、基本的な語彙力の強化と、英文内容の理解力を高めておく必要があるという点で国公立大の場合と違いはない。国公立・私立を問わず、近年読解問題の長文化が進んでいるが、選択肢中心の私立大の問題は、1題の英文量が多いだけでなく、問題数が多いのも特徴であり、限られた時間内で設問に答えるトレーニングが絶対に不可欠である。大学によって独特な選択肢を作る大学があるので、受験大学の過去問演習は不可欠であるのは、言うまでもない。

■江本祐一(えもと・ゆういち)

東大、京大、医進の授業を主に担当。長文読解、京大英文解釈、京大英作文、医進英語などのテキスト、京大即応オープン作成メンバー。出版物は「英語暗唱文ターゲット450」(旺文社)、「入試英単語の王道」(河合出版・共著)、「センターはこれだけ」(文英堂・共著)など。

林啓館

URL <http://www.shinko-keirin.co.jp/>

〒543-0052	大阪市天王寺区大道4-3-25	TEL.06-6779-1531	FAX.06-6779-5011
〒113-0023	東京都文京区向丘2-3-10	TEL.03-3814-2151	FAX.03-3814-2159
〒003-0005	札幌市白石区東札幌5条2-6-1	TEL.011-842-8595	FAX.011-842-8594
〒461-0004	名古屋市東区葵1-4-34 双栄ビル2F	TEL.052-935-2585	FAX.052-936-4541
〒732-0052	広島市東区光町1-7-11 広島CDビル5F	TEL.082-261-7246	FAX.082-261-5400
〒810-0022	福岡市中央区薬院1-5-6 ハイヒルズビル5F	TEL.092-725-6677	FAX.092-725-6680